

■学校経営のポイント

個人面談は二等辺三角形

喜名 朝博

ここ数年、通知表の所見欄を廃止する代わりに個人面談を設定する学校が増えてきた。所見欄は推敲を重ねて作成されるだけでなく、教員相互や管理職の目を通すことができ、ぎりぎりまでブラッシュアップできる。一方、個人面談は、互いの言い方や受け止め方によって真意が伝わらなかったり、誤解を生じたりするというリスクがある。保護者との信頼関係を構築するためにも、万全を期して臨みたい。

共同注視のための環境をつくる

人と人が正対することは、互いのパーソナルスペースに侵入することであり、緊張感だけでなく敵意さえ抱くことがある。そこで、机や椅子の配置に少し角度をつけ「ハの字」にしてみよう。担任と保護者を頂点に、その先に子どもがいることを想定すると二等辺三角形になる。子どもを頂点とすれば、保護者と担任は底辺の位置関係である。正対するのではなく、そこにはいない子どもを共同注視し、子どもについての認識を共有することを個人面談の目的としたい。

共同注視のための材料を用意する

そこにいない子どもを共同注視するためには、実際に机を置いて三角形に配置するとよい。机の上には、生活や学習に関するアンケート結果、学力調査等の結果、学習成果としての作品など、子どもの姿が見える材料を置いておく。共にそれを見ながら、その子の姿を共有していく。共同注視の材料はその子の事実であり、担任の一方的な感覚や思いを排除することができる。それが保護者に誤解を与えないための手だてとなる。「こんなことができるようになっていきます」「こんなことを考えているのですね」と保護者に同意を求めながらも、必ず「ご家庭ではどうですか」と問いかける。そうすれば保護者も話しやすくなる。保護者の一番の願いは、わが子のよさを担任に

知ってほしいということなのだ。

共同注視で子どもの姿を描く

子どもたちは学校では学校向きの顔を、家庭では家庭での顔を見せる。どちらが本当の顔ということではなく、どちらもその子なのだ。その場に応じて見せる顔を変えられるようになるこそ成長の証である。保護者も担任もそのことを前提にしないと、分かり合うことはできない。

だからこそ、学校での様子を伝えつつも、必ず家庭での様子を聞くことに重点を置きたい。担任としては、学校での様子を伝えて家庭での協力を仰ぎたいところだが、「学校でのことは学校でなんとかしてほしい」というのが保護者の本音だ。担任の困り感ではなく、本人の困り感を伝えなければ共感は得られない。

それよりも、学校では見せない家庭での顔を知ることの方がずっと有益だ。子どもたちのよさを知れば、学校でそれを引き出してあげることができる。さらに、「お家の手伝いしてすごいねって、先生言ってたよ」と「三角褒め」ができれば、保護者も子どもも幸せな気持ちになる。子どもたちも自分のことをもっと知ってほしいと願っているのだ。

底辺の距離を縮める

個人面談のゴールは、子どもに関する認識を共有して保護者との距離を縮めることである。子どもを頂点としたときの底辺が短くなれば、頂点の角度は鋭角となり、その方向性が定まる。それだけでなく、見かけの高さもぐんと伸びていく。子どもたちが迷わずに真っ直ぐ成長するには、子どもを頂点とした保護者と担任の二等辺三角形を意識することが重要だ。そのための最初の作図作業である個人面談を、いい形で終わらせよう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

広がりを見せる**チーム担任制**の魅力を伝えます！

チーム担任制のはじめかた

三浦 清孝【著】 四六判／定価 2,530 円

■本の詳細の確認およびご注文は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

